

フェリス女学院大学
キリスト教音楽研究所編

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ作曲

カンタータ第123番

〈愛するイマヌエル、信仰厚き者の将軍よ〉について

音楽学部 楽理学科講師

荒川 恒子

バッハのカンタータ123番《愛するイマヌエル、信仰厚き者の将軍よ》は、1725年の顕現祭のために作曲された作品です。この時代には、顕現祭は重要な祝日で1月6日に祝われました。なおその日の礼拝ではマタイによる福音書第2章1-12節が読まれます。そこには東方から3人の占星術の学者が星に導かれてベツレヘムに来て、幼子と母マリアを拝んだ旨が示されています。つまり顕現祭とはイエスの降誕にまつわって、語り伝えられる物語をテーマとする祝日なのです。しかしこのカンタータは、そのような具体的な内容は暗示しているにすぎません。むしろ一般的な信仰告白ともいえるべき歌詞をもっているのです。その理由として、この日に読まれる聖書のもう一箇所が関わっていると考えられます。それはイザヤ書第60章1-6節で、そこには栄光と救いの到来が予言されています。この曲は、その箇所を敷衍しているような内容といえましょう。

さて1725年は、カンタータ作曲家としてのバッハにとって、特別な意味をもつ年となりました。1723年4月22日にライプツィヒのトーマス教会カントルとなったバッハは、まず毎日曜日に歌うためのカンタータの整備に精力を傾けましたが、その中で1724年の三位一体の祝日後の第1日曜日（6月11日）から1725年にかけての一年分の作品全体が、特別な意図をもって書かれているからです。すなわちこの年度には、説教の直後に会衆によって歌われるコラールを土台とした、いわゆるコラール・カンタータが、バッハの手によってまとめて作曲されたのです。《愛するイマヌエル、信仰厚き者の将軍よ》は、A. フリッチュの同名のコラール（1670年）の第1節を冒頭合唱に、第6節を最後の合唱に用いてい

ます。間に挟まれたレチタティーヴォとアリアの作詞者は不詳ですが、コラルの他の節をアレンジしています。なおこのようなやり方は、コラル・カンタータの常套手段でした。

このカンタータには、バロック時代の作曲家であるバッハがなした、音楽表現上の工夫が随所にみられます。例えば楽曲全体の調性プランが挙げられます。冒頭合唱は、作品の基調となるロ短調です。アルトのレチタティーヴォは、次のアリアへの経過的な役割をはたし、ロ短調の属和音で始めイ長調で終わります。テノールのアリアは、イ長調の平行短調である嬰へ短調です。バスのレチタティーヴォは再びイ長調の属和音で始まり、ニ長調で終わります。それをうけて、バスのアリアはニ長調、そして最後のコラルは冒頭のロ長調に戻ります。まさに関係調の間を巧みに移行していきます。しかしこれらの調性の性格を、バッハの同時代者であるヨハン・マッテゾン（1681-1764）の言葉を借りて説明してみると、とんでもないこととなります。まず基調となるロ短調ですが、「奇異で不快、メランコリックなものです。そのためめったに用いられません。昔の人達がこの調を修道院から排斥したばかりでなく、思い浮かべることさえ禁じたのは、おそらくこの調のもつ性格のためでしょう」ということです。テノールのアリアの調である嬰へ短調は「とても憂愁のこもった調です。それは致命的なものというよりは、悩ましげで恋に夢中になっているような感じを表わします。さらに何か見捨てられたような、孤独な厭世的な面をもっています」。このアリアの歌詞全体は、決して弱々しい、挫けそうな心持ちを示しているわけではありません。むしろ確固とした信仰心の表示とさえいえます。しかしここには「厳しい」「苦い」「涙する」「猛り狂う嵐」といった言葉が散りばめられています。バロック時代の音楽家は、歌詞全体のムードとか内容に対して反応するというより、一語一語を、それに相応しい調や音進行を選んで表現していたことがわかります。バスのアリアはニ長調ですが「幾分鋭く、がんこな性質です。賑やかで楽しいもの、好戦的なもの、鼓舞するようなものに最も適しています。しかしトランペットではなくフルートが、ティンパニではなくヴァイオリンが流行ってきた今日、繊細な曲のための気のきいた手段となるはずです」。事実この曲にはオブリガート楽器としてフルートがからみます。歌詞の哀願を帯びた側面が浮き彫りにされるようです。

楽器編成にも興味深い点があります。冒頭と最後のコラルには、本曲で使用される楽器が勢ぞろいします。すなわちフルート、オーボエ・ダモーレ、バイオリン、ヴィオラです。レチタティーヴォには通奏低音が用いられるのみです。テノールのアリアには2本のオーボエ・ダモーレが、バスのアリアにはフルートがオブリガートとして付き添います。再びマッテゾンの言葉を用いて、楽器の特性を描写してみましょう。オーボエは「歌に倣って格調高く演奏されるならば、フルートについて人間の声に近いものになります。特にこの楽器の奏者には、歌唱に関するあらゆる知識が必要とされます。ともするとデリカシーを欠いた演奏になりかねないからです」。フルートという言葉は、当時リコーダーとフルートの両方を意味していました。しかしマッテゾンはフルートが今後リコーダーよりも好まれる楽器になると予感しているようです。バッハもライプツィヒに来てからは、リコーダーではなくフルートをよく用いるようになります。フルートは「識者によれば、柔らかい人間の声にちかづくことを最もめざした楽器で、正しい判断力をもって演奏された場

合には、高く評価されます。でも吹きかたを習得するのは難しいようです」。ふたつの管楽器の紹介に繰返しでてくる「人間の声」は、楽器を高く評価する際にしばしば比喩として用いられます。なおバッハは普通のオーボエより短3度低いオーボエ・ダモーレ（愛のオーボエ）や、さらには5度低いオーボエ・ダ・カッチア（狩のオーボエ）を好んで用いました。楽器につけられた形容詞が、これらのオーボエに付加された性格を示しています。

今回は調性と楽器の性格についてのみ、当時の識者を代表させてマッテゾンの言葉を借りて紹介してみました。この2点を歌詞と組み合わせて分析するだけでも、バッハが音楽を通して言いたかったことの一端が見えてくるようです。その他声種の選び方、使用する拍子、リズム、音程等、楽曲にでてくるあらゆる音楽現象の奥に、何か秘密のメッセージが隠されているようです。最後にもうひとつ！ 最終コラールの最後の言葉「わたしの全生涯をあなたに委ねます。いつの日にか、わたしが墓に横たえられる時まで」は、本来一度唱えられるだけです。しかしバッハはこの言葉を二回、しかも二回目にはピアノで歌うように指示しているのです。バッハはなぜそのようにしたのでしょうか。このカンタータを通して、彼は何を私達に語りかけているのでしょうか。このささやかなメモが皆様のお考えの参考になれば幸いです。

1) Choral

Liebster Immanuel, Herzog der Frommen,
du, meiner Seelen Heil, komm, komm nur bald!
Du hast mir, höchster Schatz, mein Herz genommen,
so ganz vor Liebe brennt und nach dir wallt.
Nichts kann auf Erden mir Lieb'res werden,
als wenn ich meinen Jesum stets behalt'.

1) コラール（合唱）

愛するイマヌエル、信仰厚き者の將軍よ
来てください、わたしの魂の救いよ、すぐに来てください！
わたしの至高の宝、あなたはわたしの心をとらえました
わたしの心はあなたへの愛に燃え、あなたを慕って沸き立ちます。
この世にあって、なにもものもこれほどまでに愛しくはないでしょう
わたしのイエスをいつも胸に抱くことほどには。

2) Recitativ (Alto)

Die Himmels-Süssigkeit, der Auserwählten Lust,
erfüllt auf Erden schon mein Herz und Brust,
wenn ich den Jesus-Namen nenne
und sein verborg' nes Manna kenne:
Gleichwie der Thau ein dürres Land erquickt,
so ist mein Herz auch bei Gefahr und Schmerz
in Freudigkeit durch Jesu Kraft entzückt.

2) レチタティーヴォ（アルト）

天の甘美さ、選ばれた者の喜びは
この世ですでにわたしの心と胸を満たします、
わたしがイエスの御名を呼び
彼の隠されたマナを知る時。
露が乾いた大地を潤し活かすように、
わたしの心は危うさと苦難にあっても
イエスの力によって喜び勇みます。

3) Arie (Tenore)

Auch die harte Kreuzesreise,
und der Thränen bitt're Speise
schreckt mich nicht!
Wenn die Ungewitter toben,
sendet Jesus mir von oben Heil und Licht.

3) アリア（テノール）

厳しい十字架の旅路にも
また涙する苦い糧にも
わたしは恐れをしりません。
嵐が猛り狂えば
イエスが天から私に救いと光を遣わされるのです。

4) Recitativ (Basso)

Kein Höllenfeind kann mich verschlingen,
das schreiende Gewissen schweigt.
Was sollte mich der Feinde Zahl umringen?
Der Tod hat' selbst keine Macht,
mir aber ist der Sieg schon zgedacht,
weil sich mein Helfer mir, mein Jesus, zeigt.

5) Arie (Basso)

Lass', o Welt, mich aus Verachtung
in betrübter Einsamkeit!
Jesus, der in's Fleisch gekommen
und mein Opfer angenommen,
bleibet bei mir allezeit.

6) Choral

Drum fahrt nur immerhin, ihr Eitelkeiten!
Du, Jesu, du bist mein und ich bin dein;
Ich will mich von der Welt zu dir bereiten;
du sollt in meinem Herz und Munde sein!
Mein ganzes Leben sei dir ergeben,
bis man mich einstens legt in's Grab hinein.

4) レチタティーヴォ (バス)

どんな黄泉の敵もわたしを呑みほすことはできず
口さがない道徳も黙します。
どんな多くの敵がわたしを取り囲むというのでしょうか。
死でさえ威力を持ちません
わたしにはすでに勝利が約束されているのです
わたしの救い主イエスが、御自身を示されたからです。

5) アリア (バス)

この世よ、わたしを蔑み
わびしい孤独のうちに捨ておいてください。
イエスは肉の身でわたしのもとにこられ
わたしの捧げ物を受け取られ
いつでもわたしのそばに留まられるのです。

6) コラール (合唱)

それゆえただ通りすぎなさい、空しきものよ。
イエスよ、あなたはわたしのもの、わたしはあなたのものです。
わたしはこの世を去りあなたの身許にむかう備えをしましょう。
あなたこそわたしの心、わたしの口にあってください。
わたしの全生涯はあなたに委ねます
いつの日にか、わたしが墓に横たえられる時まで。